

江戸東京研究センター

I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020年度大学評価結果総評】(参考)

江戸東京研究センターの研究活動は、シンポジウムやセミナーなどの交流・公開の機会を通じて活発に行われている。多彩な内容の著書、報告書、論文、学会発表、科研費の採択状況など、旺盛な研究活動には目を見張るものがある。教育活動についても、新たに「神田明神江戸東京文化講座」を開講するなど、社会教育活動に努めていることは高く評価できる。複数の大学学長と連名で都知事に政策提言をした点は、今後の行政と大学との政策連携の道を拓くものとして大いに注目される。

江戸東京研究センターの研究姿勢は、「異分野の融合」を目指したものとはいえ、自己点検・評価シートの記載内容を見る限りでは、諸研究を縦割的（個別、領域内の共同研究）に集合化させる様子が見られる。統一テーマのもとに異なる領域や専門分野を横串に通すスタイルの学際的な共同研究がほとんど見られないことは惜まれる。実際には様々な検討や試みが行われていると思われるが、国のブランディング事業の中止と大幅な予算削減に伴う複数のプロジェクトの見直しとあわせて、江戸東京研究センターの設置理念に則して、学術論文や科研費の研究プロジェクトなどにより、学際的な共同研究の視覚化をはかることに期待したい。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

・評価結果「江戸東京研究センターの研究姿勢は、「異分野の融合」を目指したものとはいえ、自己点検・評価シートの記載内容を見る限りでは、諸研究を縦割的（個別、領域内の共同研究）に集合化させる様子が見られる。統一テーマのもとに異なる領域や専門分野を横串に通すスタイルの学際的な共同研究がほとんど見られないことは惜まれる。」

対応状況：ご指摘いただいた点こそが江戸東京研究センターの特徴であり、ほぼすべてのシンポジウムや研究会で異分野の研究者が融合するよう、一つのテーマに対し様々な視点からアプローチ、解説する方法を徹底している。それを踏まえて、2022年度以降のセンターの継続が認められしだい、共同研究をさらに推進するためのプロジェクトテーマを新たに設定していく予定である。

・評価結果「国のブランディング事業の中止と大幅な予算削減に伴う複数のプロジェクトの見直しとあわせて、江戸東京研究センターの設置理念に則して、学術論文や科研費の研究プロジェクトなどにより、学際的な共同研究の視覚化をはかることに期待したい。」

対応状況：ご指摘に沿って、2021年度中に学際的な共同研究を前面に打ち出した大型研究費の申請を行う予定である。同時に、法政大学として、江戸東京研究センターを大学の「教育研究ブランディング」であると社会に広く標榜した以上、大学が当センターの位置づけをどのように考えているのか、組織の存続をいかなる方法で解決しようとしているのかを双方で考えていきたい。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

江戸東京研究センターでは、2021年度中に学際的な共同研究を前面に打ち出した大型研究費の申請を行う予定であるという方向性が示されており、評価できる。

2020年度の実績を見ると、2回の国際シンポジウムや国内シンポジウムの開催、研究会、公開講座の実施、著書・論文の発行など、着実な成果を上げており、学際的な共同研究の拠点としての意義を高く認めることができる。

法政大学として江戸東京研究センターをどう位置付けていくかが整理されることが今後の共同研究推進の前提となることから、大学との協議を尽くしていただきたい。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2021年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2020年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2020年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

法政大学江戸東京研究センターは、2017年度末に文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」の採択を受けてから実に積極的な活動を続けてきた。5つのプロジェクトを柱に、持続可能な地球社会の実現に向け、近代のパラダイムを超えた都市の未来を考えるための新・江戸東京研究を法政大学のブランドとして位置づけ、成果を発信し、社会においてその認知を推し進めることに、この短期間でほぼ成功したと言ってもいいだろう。国内の他の大学や研究機関、また行政、市民とも連携しつつ、多様なネットワークを生かした研究、発信、貢献が着実に成し遂げられたのである。

そうしたなか、2020年度はコロナ禍にあっても、数々のシンポジウムや研究会、イベントを開催し、著書の刊行、論文の公開などを実施して、昨年度と変わらず継続的に当センターの役割を社会に訴え、また新たな江戸東京研究の創出に向けて研究員一同、勢威努力を続けることができた。とりわ

げ、2020年度は研究の対象や共同研究者のターゲットの重点を国内から国外へと広げるため、「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」を目標とした。すでに実施した2020年1月のヴェネツィアでの国際シンポジウムに続き、日中韓を主体とするアジア国際シンポジウムや日韓の交流イベントを開催し、国際的な学術交流をより深化させるとともに、研究内容を世界に向けて発信した。

以下、年度当初の事業計画書に記載した項目ごとに、その実績の要約を記載する。

1. 国際シンポジウムの開催

2020年度は、10月17日に日中韓を主体とする国際シンポジウム「都市・自然・人間」を東アジア都市史学会と共同で開催することが計画通りに実現できた。オンラインによる開催で同時通訳も行い、当センターがアジアにおける情報発信の拠点となる礎を気づくことができた。また、計画書に記載した国際シンポジウム「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」を同じくオンラインを使用して2021年2月20日(土)に開催することができた。こうして、オンラインであっても計画書のすべての実施を実現し、学際的かつ国際的な学術交流をより深化させるとともに、研究成果を世界に向けて発信することができた。

2. 研究会の開催

4プロジェクト全体で10件ほどの研究会を当初計画したが、1の国際シンポジウムとは別に、6件の国内シンポジウム、研究会、公開講座を実施することができた。コロナ禍の影響で秋学期に体制が整ってからは、むしろオンラインの強みを生かして学際的な研究活動を実施した。

3. 著書・論文の発行

事業計画書提出の段階ではすでに著書3件、報告書1件が発行されており、その後の2020年度中に、著書4件、論文37件、そのうち査読付き論文3件、学会発表9件、報告書1件、成果に対する書評9件、その他メディア出演や一般雑誌の掲載26件を続けて公表し、コロナ禍にあっても精力的な研究活動が行われ、広く社会に本事業の重要性をアピールした(2021年2月20日現在)。そして、現在、2020年1月開催のヴェネツィアでのシンポジウムの成果を日本語と英語で発行する作業に入っており、2021年度夏の発行に向けて準備が進められている。

国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターを基盤として作られた当センターは、学際的に相互の研究者が共同で研究し、成果を公開していくことで、その独自性をより強く打ち出すことができる。一つの対象を歴史や美術の社会的な観点と建築や地理の空間的観点の両面から立体的かつ学際的に解明していくことが一つの具体的な事業計画となる。当センターが掲げる「新・江戸東京研究」は、

まさに歴史学、美術史、文学、文化人類学、社会学、地理学、都市建築学、環境学などの多様な分野が常に一堂に会し共同することにより、その視点や方法もまた新規性に満ちたものとなるようチャレンジを続けている。とくに、2020年度は国内のみならず、海外の大学や研究機関との連携を強くし、研究交流を深め、世界に向けてその成果を発信していくことを目標とし、ほぼ達成できたといっている。

そして、2021年度はこれまでのまとめと今後の当センターのビジョンの作成が重要な課題であり、それをベースに大型研究費の申請を行って、2022年度以降の当センターが学界や社会に果たすべき役割の基盤づくりを成し遂げることが大きな目標となる。

4. 研究プロジェクト

①水都ー基層構造

プロジェクト・リーダー：高村雅彦(デザイン工学部建築学科教授)

研究テーマ：都市と地域のテリトリーと文化的景観

②江戸東京の「ユニークさ」

プロジェクト・リーダー：小林ふみ子(文学部日本文学科教授)

研究テーマ：「江戸東京の生活文化的特性」

③テクノロジーとアート

プロジェクト・リーダー：都合により2020年度途中に安孫子信(文学部哲学科教授)から山本真鳥(経済学部経済学科教授)に、また2021年4月から岡村民夫(国際文化学部国際文化学科教授)に交代

テーマ：東京のパブリック・アート

④都市東京の近未来

研究プロジェクト・リーダー：北山恒(デザイン工学部建築学科教授)、2021年4月から山道拓人(デザイン工学部建築学科専任講師)に交代

研究テーマ：国際的研究ネットワークの構築・プロジェクトサイトの策定・行政とまちづくりの連携研究

⑤江戸東京アトラス

研究プロジェクト・リーダー：福井恒明(デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授)

研究テーマ：名所の変遷から江戸東京の基層を探る

5. 講義・教育プログラム

①春学期全14回 デザイン工学部講義「フィールドワーク」

②春学期後半全14回 デザイン工学部講義「都市史」

6. シンポジウム・研究会等

【国際シンポジウム】

・「都市・自然・人間」、2020年10月17日(土)

・「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」、2020年2月20日(土)

【国内シンポジウム・研究会】

・「第2回テリトリー研究会ーイタリア農業の底力ー」、2020年9月16日(水)

・「東京の新名所：史蹟と銭湯」、2020年10月24日(土)

・「神谷博 法政大学退任記念特別講義」、2020年11月11日(水)

・「先人はすごかった！総長と学ぶ江戸ロジー」、2020年11月17日(火)

・「米国写真アーカイブスでたどる占領期の東京」、2020年11月20日(金)

・「パブリックアートと東京」、2020年11月28日(土)

・第11回外濠市民塾「『外濠BAR』おぼんカウンター作成」、2020年11月29日(日)

- ・「東京写真の新たな可能性」、2021年1月23日（土）
- ・「江戸東京アトラス研究ワークショップ」2021年2月28日（日）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・江戸東京研究センター「江戸東京研究センター 2020年度報告書 vol.4」
https://edotokyo.hosei.ac.jp/research/evaluation/progress_report
- ・江戸東京研究センターwebサイト
<https://edotokyo.hosei.ac.jp/research>
https://edotokyo.hosei.ac.jp/symposium_collegium
<https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications/activity>

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2020年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

1. 著書・報告書・制作物

著書

書名：【EToS 叢書 2】『風土(Fudo)から江戸東京へ』著者名：安孫子信（監修）

出版社：法政大学出版局発行年月：2020年3月

論文標題：「序—なぜ風土(Fudo)なのか」著者名：安孫子信

論文標題：「和辻哲郎にとっての東京—田舎あるいは古代という対立軸から」著者名：衣笠正晃

論文標題：「文化的景観と風土、その担い手」著者名：福井恒明

論文標題：「水性の東京—映画に対する風土学の試み」著者名：クレリア・ゼルニック／岡村民夫訳

論文標題：「総括—風土(Fudo)と「珍しさ」の諸相」著者名：陣内秀信

書名：『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』編者名：小林ふみ子、中丸宣明（編）

出版社：文学通信

発行年月：2020年6月

論文標題：「江戸の歴史のたどり方—考証の先達、瀬名貞雄・大久保忠寄と大田南畝」著者名：小林ふみ子

論文標題：「風俗を記録する意図—雑芸能者たちの〈江戸〉」著者名：小林ふみ子

論文標題：「受け継がれた江戸—高島藍泉の考証随筆」著者名：中丸宣明

論文標題：「あとがき」著者名：中丸宣明

書名：『江戸とアバター 私たちの内なるダイバーシティ』著者名：田中優子、池上英子

出版社：朝日新聞出版

発行年月：2020年3月

書名：『日本思想史事典』

著者名：小林ふみ子（項目執筆） 標題：「戯作の世界」

発行：丸善出版

発行年月：2020年4月

書名：『イタリアの中世都市—アゾロの都市から領域まで』伊藤毅（編）

論文表題：「ヴェネト州の都市と地域の空間構造—地形と河川からの視点を中心として」著者名：陣内秀信（分担執筆）

出版者：鹿島出版会

発行年月：2020年4月

書名：『島原よろずまち湧水散策』

著者名：島原中心市街地街づくり推進協議会

図面・資料・文章提供：高村雅彦

出版社：島原中心市街地街づくり推進協議会

発行年月：2020年5月

書名：『奇跡の住宅 旧渡辺甚吉邸と室内装飾』

著者名：栗生はるか、金谷匡高、他（共著）旧渡辺甚吉邸サポーターズ（監修）

出版社：LIXIL出版

発行年月：2020年6月

書名：『現代フランス哲学入門』川口茂雄・越門勝彦・三宅岳史（編）

著者名：安孫子信（分担執筆）

出版社：ミネルヴァ書房

発行年月：2020年7月

書名：『水都 東京—地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』

著者名：陣内秀信
出版社：筑摩書房
発行年月：2020年10月

書名：『苦海・浄土・日本 石牟礼道子もだえ神の精神』
著者名：田中優子
出版社：集英社
発行年月：2020年12月

書名：『宮沢賢治論 心象の大地へ』
著者名：岡村民夫
出版社：七月社
発行年月：2020年12月

書名：『江戸問答』
著者名：田中優子・松岡正剛
出版社：岩波書店
発行年月：2021年1月

書名：『都市科学事典』
著者名：北山恒（分担執筆）
出版社：春風社
発行年月：2021年2月

書名：『国絵図読解事典』小野寺淳、平井松午（編）
著者名：米家志乃布（分担執筆）
論文表題：「22 蝦夷地像の変遷と蝦夷図」
出版社：創元社
発行年月：2021年2月

書名：『港区史』通史編（原始・古代・中世）
著者名：小口雅史
出版社：港区
発行年月：2021年3月

報告書

報告書名：【EToS 報告書6】「テクノロジーと東京」編者名：山本真鳥
出版社：法政大学江戸東京研究センター発行年月：2020年3月
論文表題：「交通体系の変化と東京の都市構造の変容」著者名：陣内秀信
論文表題：「効率の最大化によって変質する都市空間」著者名：岩佐明彦
論文表題：「やわらかい都市のテクノロジー」著者名：北山恒
論文表題：「失われた場所、失われた時間」著者名：高村雅彦

報告書名：シンポジウム「地域から外濠の再生を考える」
著者名：外濠再生懇談会、法政大学江戸東京研究センター、法政大学エコ地域デザイン研究センター、東京理科大学外濠
および神楽坂地域調査研究推進室

発行年月：2020年3月
標題・発表者名：「趣旨説明」陣内秀信
標題・発表者名：「外濠文化の可能性」田中優子
標題・発表者名：「外濠再生憲章について」福井恒明
資料表題：「都知事への提言実施と東京都「未来の東京」戦略ビジョンへの反映」
資料表題：「外濠・日本橋川の水質浄化と玉川上水・分水網の保全再生について（提言）」

報告書名：【EToS 報告書】「東京発掘プロジェクト 水辺編Ⅱ」監修：高村雅彦・皆川典久
出版社：法政大学江戸東京研究センター発行年月：2020年4月

制作物

制作名：【EToS 制作物】「水都江戸の基層・中世武蔵国絵図」
著者名：江戸東京研究センター「水都一基層構造」プロジェクトチーム・神谷博
出版社：法政大学江戸東京研究センター発行年月：2020年7月

論文

論文標題：「フォーラム 近代の名所図会にみる江戸イメージ」 著者名：米家 志乃布
雑誌名：法政地理 (52), 109-124 発行年月：2020年3月

論文標題：「江戸町方における火の見櫓の建設と御鷹御用一牛込揚場町を事例として」
著者名：根崎光男
雑誌名：人間環境論集 第20巻第2号
発表年月：2020年3月23日

論文標題：「置屋根が冬の室内環境に与える影響について」 著者名：金田正夫・出口清孝
雑誌名：民俗建築 第157号
発表年月：2020年5月30日

論文標題：「街づくり、景観と都市デザイン」 著者名：高見公雄
雑誌名：新都市 令和2年6月号
発表年月：2020年6月

論文標題：「分散型仮設団地と被災者の継続居住—熊本県嘉島町をケーススタディとして」
著者名：富安亮輔, 岩佐明彦
雑誌名：日本建築学会技術報告集 第63号
発表年月：2020年6月

論文標題：「横浜都市デザイン概観」 著者名：北山恒
雑誌名：都市美第2巻
発表年月：2020年6月

論文標題：「竜と詩人」 小論-詩から「設計」への転回を海蝕洞窟に見る」
著者名：岡村民夫
雑誌名：賢治学 第7輯発表年月：2020年6月

論文標題：「文京建築会ユースの取り組み」
著者名：栗生はるか
雑誌名：建築士 Vol. 69, No. 814
発表年月：2020年7月

論文標題：「戦後住宅クロニクル」
著者名：北山恒
雑誌名：建築ジャーナル No. 1306
発表年月：2020年7月

論文標題：「東京2020の「いままで」と「これから」のまちづくり」
著者名：陣内秀信
雑誌名：建築士 Vol. 69, No. 814
発表年月：2020年7月

論文標題：「徳川御殿の時期区分試論—将軍の鷹狩りを中心に—」
著者名：根崎光男
雑誌名：人間環境論集 (法政大学人間環境学会)
巻号：21(1)
発行年月：2020年10月31日

論文標題：「明治以降の近代化に伴う公共空間の変遷—上野公園に関する新聞記事の考察—」
著者名：増田政弘、福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集
巻号：16
発行年月：2020年12月

論文標題：「水害リスク地域における市街地の展開過程とその要因」
著者名：阿部遼磨, 福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集
巻号：16
発行年月：2020年12月

論文標題：「千代田区を対象とした古写真のアーカイブ化」

著者名：藤田景、福井恒明

雑誌名：景観・デザイン研究講演集

巻号：16

発行年月：2020年12月

論文標題：『婦人之友』誌にみる住まい方と価値観の変遷」

著者名：増渕実希、荻原知子、福井恒明

雑誌名：景観・デザイン研究講演集巻号：16

発行年月：2020年12月

論文標題：「川と地域が一体となったまちづくり推進における かわまちづくり支援制度の寄与」

著者名：堀越義人、福井恒明

雑誌名：第62回土木計画学研究・講演集（CD-ROM）巻号：62

発行年月：2020年

論文標題：「観光考古学への期待」著者名：福井恒明

雑誌名：観光と考古学巻号：1

発行年月：2020年

論文標題：「四方赤良こと大田南畝判『狂歌角力草』稿本解題・翻刻」

著者名：小林ふみ子

雑誌名：法政大学文学部紀要巻号：81

発行年月：2020年

論文標題：「戦前期東京都における史蹟の分布とその特徴 - 『東京都史蹟名勝天然記念物旧市域内』（1943）の分析 - 」

著者名：米家志乃布

雑誌名：法政大学地理学会70周年記念論文集

発行年月：2021年3月

学会発表

発表標題：「広州における建国前後の都市計画と住宅地の変遷－東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究 その5」

発表者名：邵 帥、高村 雅彦

学会等名：日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）

発表場所：オンライン

発表年月：2020年9月

学会発表（招待講演・国際学会）

発表標題：「文京建築会ユースの取り組み」発表者名：栗生はるか

学会等名：日本建築士会連合会 第28回まちづくり会議発表場所：笹川記念会館

発表年月：2020年1月

発表標題：Maintenance and succession of “regional ecosystems” - examples of public bath “, sento” in Tokyo

発表者名：栗生はるか

学会等名：Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives

発表場所：Ca' Foscari University of Venice

発表年月：2020年1月

発表表題：Descriptions forming Memories : The History of Geographic Records of Edo-Tokyo and water

発表者名：小林ふみ子

学会等名：Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives

発表場所：Ca' Foscari University of Venice

発表年月：2020年1月

発表表題：Mapping Tokyo: Cartography and the Representation of the Capital of Japan in the 20th Century

発表者名：米家志乃布

学会等名：Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives

発表場所：Ca' Foscari University of Venice

発表年月：2020年1月

発表表題：Process of Regeneration of Water City in Tokyo and its Future Vision

発表者名：陣内秀信

学会等名：Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives

発表場所：Ca' Foscari University of Venice

発表年月：2020年1月

発表表題：Appropriate Range of the City in Edo-Tokyo provided by the Historical Sacred Place of the Water

発表者名：高村雅彦

学会等名：Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives

発表場所：Ca' Foscari University of Venice

発表年月：2020年1月

発表表題：Waterside Culture in Edo (江戸の水辺文化) 発表者名：田中優子

学会等名：Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives

発表場所：Ca' Foscari University of Venice 発表年月：2020年1月

発表表題：Attempt of conservation and restoration of cultural landscape in Tokyo - Case of Edo castle outer moats and Katsushika-Shibamata temple town

発表者名：福井恒明

学会等名：Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives

発表場所：Ca' Foscari University of Venice

発表年月：2020年1月

発表表題：The Beginning and the Present Condition of Collective Housing in Tokyo: Center-Periphery, Inland-Waterfront

発表者名：渡辺真理+木下庸子

学会等名：Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives.

発表場所：Ca' Foscari University of Venice

発表年月：2020年1月

発表表題：「将軍の鷹狩と御殿」 発表者名：根崎光男

学会等名：江戸遺跡研究会第32回大会・徳川御殿の考古学

発表場所：駒沢大学駒沢キャンパス2号館

発表年月：2020年2月

発表表題：「徳川将軍の鷹狩りと鷹場」 発表者名：根崎光男

学会等名：第3回東アジア都市史学会学術大会法政大学（オンライン開催）

発表年月：2020年10月17日

発表表題：「水都東京—<水>から読みとく都市・自然・人間のむすびつき」

発表者名：陣内秀信

学会等名：第三回東アジア都市史学会学術大会発表年月：2020年10月

発表表題：「東京に秘められた水都としての可能性」 発表者名：陣内秀信

学会等名：江戸東京歴史文化ルネッサンス設立3周年記念シンポジウム

発表年月：2020年10月

発表表題：「都市の歴史と保存活用の考え方—日本とアジアを例に—」

発表者名：高村 雅彦

学会等名：飯田アカデミア（飯田市歴史研究所）

発表場所：オンライン開催

発表年月：2020年10月

発表表題：The Mediator of "immigration citizens": A study on the history of Asian modern cities and architecture from the viewpoint of the Resident-style immigration

発表者名：BAO Muping, TAKAMURA Masahiko

学会等名：The 3rd international conference of the East-Asian Society for Urban History（オンライン開催）

発表年月：2020年10月17日

発表表題：「大衆化のなかの国文学／国文学界——戦前・戦後の連続性から考える」

発表者名：衣笠正晃

学会等名：昭和文学学会秋季大会（オンライン開催） 発表年月：2020年11月7日

- 発表標題 : Riqualificazione e rivitalizzazione dei centri storici e territori storici negli anni recenti in Giappone
 発表者 : Hidenobu Jinnai
 学会等名 : Convegno internazionale di ANCSA (イタリア/全国歴史芸術都市保存協会の創立 60 周年記念大会) Italy/Gubbio(オンライン開催)
 発表年月 : 2020 年 12 月
- 発表標題 : I ventennali risultati di un progetto di ricerca : dal centro storico di Amalfi alla Costiera Amalfitana
 発表者 : Hidenobu Jinnai
 学会等名 : Convegno di studi: Le 'Città dell' acqua' sulle Coste d' Amalfi e Venezia. Valori, immagine, progetto, Amalfi.
 発表年月 : 2020 年 12 月
- 作品
 作品名 : K2 house 著者名 : 下吹越武人
 賞 : 住まいの環境デザイン・アワード 2020 グランプリ受賞日 : 2020 年 2 月
- 作品名 : K2 House 著者名 : 下吹越武人
 雑誌名 : 新建築 2020 年 2 月号発行年月 : 2020 年 2 月
- 作品名 : K2 House 著者名 : 下吹越武人
 雑誌名 : エル・デコ 4 月号発行年月 : 2020 年 2 月
- 作品名 : K2 house 著者名 : 下吹越武人
 賞 : 日本建築学会作品選集 2020 発行日 : 2020 年 3 月
- 作品名 : K2 house 著者名 : 下吹越武人
 賞 : 日本建築学会作品選奨受賞日 : 2020 年 4 月
- 作品名 : K2 House 著者名 : 下吹越武人
 雑誌名 : モダンリビング No. 250 発行年月 : 2020 年 4 月
- 作品名 : 中央ラインハウス 小金井著者名 : 北山恒 (設計)
 雑誌名 : 日経アーキテクチュア 2020 年 7 月号、pp66-72 発行年月 : 2020 年 8 月
- 作品名 : 中央ラインハウス 小金井著者名 : 北山恒 (設計)
 雑誌名 : 「新建築」、2020 年 8 月号発行年月 : 2020 年 8 月
3. 査読付き論文
 論文標題 : The locus of my study of Tokyo: From building typology to spatial anthropology and eco-history
 著者名 : 陣内秀信
 雑誌名 : Japan Architectural Review—International Journal of Japan Architectural Review for Engineering and Design
 巻号 : Volume3, Issue3 発行年月 : 2020 年 7 月
- 論文標題 : 「鎌倉南北朝期の雲版と禅院・律院」
 著者名 : 大塚 紀弘
 雑誌名 : 日本宗教文化史研究 = The Journal of Japanese religious and cultural history
 巻号 : 24(2)
 発行年月 : 2020 年 11 月
- 論文標題 : 「「対話」は事業参加の場—ダム建設事業に見る合意形成の条件—」
 著者名 : 長谷部 俊治 雑誌名 : 土木学会誌
 巻号 : Vol. 105 No. 3
 発行年月 : 2020 年 3 月
- 論文標題 : The Cartographic Heritage of Tokyo: The Representation of Urban Landscapes on Maps from the Seventeenth to Nineteenth Centuries
 著者名 : Shinobu Komeie
 雑誌名 : Journal of Research and Didactics in Geography (Italian Association of Geography Teachers)
 巻号 : 2

発行年月：2020年12月

論文標題：「南畝の狂歌の評価軸」 著者名：小林ふみ子
雑誌名：近世文藝巻号：113
発行年月：2021年1月

4. その他

標題：「函館港の現在と過去」（総特集 北前船日和山之景） 著者名：米家志乃布
雑誌名：『地図中心』（571）発行年月：2020年4月

標題：「渋谷問題」 著者名：北山恒
媒体名：建築時評コラム 驟雨異論発行年月：2020年4月

標題：「追悼 芳賀徹：「徳川時代」と都市・東京に注いだ国際的で開かれた視線」
著者名：陣内秀信
雑誌名：『東京人』2020年5月号発行年月：2020年5月

標題：「未来に向けた新たな住まい方」 著者名：陣内秀信
雑誌名：『建築東京』Vol. 56, No. 668 発行年月：2020年6月

標題：「未来都市はムラに近似する」 著者名：北山恒
媒体名：建築時評コラム 驟雨異論発行年月：2020年7月20日

出演者：金谷匡高他
媒体名：NHK「おはよう日本」TV 発表年月：2020年9月8日
標題：特集「台風15号から1年 島の文化を守りたい」
内容：新島の歴史的な建物群や景観をどのように残し後世に伝えていくか

出演者：金谷匡高他
媒体名：NHK「ちかさとナビ」ウェブサイト発表年月：2020年9月8日
標題：「台風15号（2019年）被害の新島 石造りの街並みを修復」
URL：<https://www.nhk.or.jp/shutoken/ohayo/20200908.html>

標題：「クリストファー・アレグザンダーの「人間都市」（a human city）を知っているか」
著者名：北山恒
媒体名：建築時評コラム 驟雨異論発行年月：2020年10月20日
発表者：田中優子

標題：基調講演「コロナで発見した5つのこと」
発表場所：「朝日教育会議「これからの大学 for ダイバーシティ ～多読・会読・連読の場～」
媒体名：朝日新聞社・法政大学発表年月：2021年11月22日
発表者名：横山泰子
学会等名：東京文化資源会議「崖東夜話」
発表年月：2020年10月13日

著者名：小林ふみ子
標題：「嘉永3年（1850）刊遠山雲如『墨水四時雑詠』注解」（分担執筆）
雑誌名：『太平余興』7集発表年月：2020年11月

著者名：小林ふみ子
標題：『『墨水四時雑詠』注解第三回 停雲会（本回担当：杉下元明・日原傳・小林ふみ子・堀口育男・佐藤温）』
媒体名：『太平余興』6集発行年月：2020年

著者名：山本真鳥
媒体名：弘文堂ウェブマガジン「オセアニアの今ー伝統文化とグローバル化」発行年月：2019年から現在
URL：<https://oceania.hatenablog.jp/>

書評

評者名：大塚紀弘
雑誌名：日本歴史（861）発表年月：2020年2月
対象書籍：稲葉伸道『日本中世の王朝・幕府と寺社』

評者名：大塚紀弘
 雑誌名：史学雑誌 129(6) 発表年月：2020年6月
 対象書籍：松尾剛次『鎌倉新仏教論と叡尊教団』

評者名：小林ふみ子
 雑誌名：『国語と国文学』97巻11号発表年月：2020年11月
 対象書籍：岩田秀行『江戸芸文攷：黄表紙・浮世絵・江戸俳諧』

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- 江戸東京研究センター「江戸東京研究センター 2020年度報告書 vol.4」
https://edotokyo.hosei.ac.jp/research/evaluation/progress_report
- 江戸東京研究センターwebサイト
<https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications>

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2020年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2020年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2020年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

1. 書評

評者名：岩田秀行
 媒体名：日本文学誌要
 書評掲載年月：2020年3月
 対象著書（著者）：『へんちくりん江戸挿絵本』（小林ふみ子、集英社インターナショナル、2019年3月）

評者名：高道昌志
 媒体名：白山史学（56）書評掲載年月：2020年3月
 対象著書（著者）：『江戸の都市化と公共空間』（松本剣志郎、塙書房、2019年2月）

評者名：角和裕子
 媒体名：日本歴史（863）
 書評掲載年月：2020年4月
 対象著書（著者）：『江戸の都市化と公共空間』（松本剣志郎、塙書房、2019年2月）

評者名：渡辺浩一
 媒体名：歴史評論 = Historical journal（844）書評掲載年月：2020年8月
 対象著書（著者）：『江戸の都市化と公共空間』（松本剣志郎、塙書房、2019年2月）

評者名：助川幸逸郎
 媒体名：図書新聞
 書評掲載年月：2020年10月17日
 対象著書（著者）：『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（法政大学江戸東京センター・小林ふみ子・中丸宣明編、文学通信、2020年6月）

評者名：松原隆一郎
 媒体名：毎日新聞
 書評掲載年月：2020年11月14日
 対象著書（著者）：『水都東京一地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』（陣内秀信、筑摩書房、2020年11月）

評者名：橋爪紳也
 媒体名：日本経済新聞
 書評掲載年月：2020年11月28日
 対象著書（著者）：『水都東京一地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』（陣内秀信、筑摩書房、2020年11月）

評者名：佐藤信
 媒体名：読売新聞
 書評掲載年月：2020年12月6日
 対象著書（著者）：『水都東京一地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』（陣内秀信、筑摩書房、2020年11月）

評者名：板坂則子
 媒体名：浮世絵芸術（181）書評掲載年月：2021年1月
 対象著書（著者）：『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（法政大学江戸東京センター・小林ふみ子・中丸宣明（編）、文

学通信、2020年6月)

2. メディア掲載

記事標題：「怪談新聞 江戸に響く恨めしや〜」媒体名：東京新聞

発行年月：2020年8月18日

内容：横山泰子教授（前・センター長）が取材協力

記事標題：「鼎談 蘇る水都の記憶と武蔵野の杜」

（特集「四谷」都心の大規模再開発 新時代の幕開け!）媒体名：『東京人』2020年12月号

発行年月：2020年11月

内容：陣内秀信特任教授が鼎談に参加

記事標題：「漢陽と江戸 それぞれの生活文化 オンラインでシンポジウム開催」媒体名：統一日報

発行年月：2021年2月25日

内容：2021年2月20日開催のシンポジウム「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」取材記事

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・江戸東京研究センター「江戸東京研究センター 2020年度報告書 vol.4」
https://edotokyo.hosei.ac.jp/research/evaluation/progress_report
- ・江戸東京研究センターwebサイト
<https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications>

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2020年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

- ・文部科学省「私立大学研究ブランディング事業（令和元年度終了分）の総括について」

以下、その全文を転載する。

「(優れている点)

- ・法政大学の立地と研究蓄積にふさわしい事業であり、推進された4つのプロジェクトのそれぞれにおいて今後につながる研究成果が得られている。
- ・江戸東京研究センターの設立は、これまでの研究の蓄積を継承しつつ情報発信を行うためのブランド戦略として非常に有効である。また、当該センターを中心に全学をあげて国際的な発信及び交流の促進を行っており、大きな成果が期待される。
- ・センターの研究成果を出版するだけでなく、概要がウェブサイトにて的確にまとめられており、情報発信に工夫がみられる。
- ・研究成果の量、質、ブランディングのインパクトなど、総合的に高く評価でき、ブランディング事業の嚆矢とも言うべき取り組みである。

(改善を要する点)

- ・江戸東京センターは少なくとも2021年度までは存続させるとあるが、同年度を大きな取りまとめの年とするとしても、同年度以降も存続させていくことが望まれる。」

以上のように、法政大学として、江戸東京研究センターを大学の研究ブランディングであると社会に広く標榜した以上、大学が当センターの位置づけをどのように考えているのか、またそれを安定的なものとするようこちらからも要望していくことで解決を図りたい。

- ・外部評価委員評価

コロナ禍の影響を受け Zoom 開催となった委員会では、3名の委員から、実施計画の適切性、事後評価及び検証、総合評価のすべてにおいて高い評価を受けた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文科省通達書
- ・外部評価委員による評価報告書

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2020年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2020年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

1. 2020年度中に応募した外部資金（全て科研費）

1) 研究代表者

- ・基盤研究(A) 福井恒明 49,394,000円 テリトリーオ概念を援用した地域課題への包括的アプローチ
- ・基盤研究(B) 岩佐明彦 19,994,000円 被災者回復ステージのガラパゴス化とそのブレイクスルー
- ・基盤研究(B) 出口清孝 5,833,000円 パッシブデザイン導入に向けた世界の建築気候図作成と気候変動適応策への応用
- ・基盤研究(C) 小林ふみ子 780,000円 江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究

・若手研究 金谷匡高 1,155,000円 明治初期転換期における士族授産による地場産業の発展と武家地空間の変遷について

・若手研究 栗生はるか 1,950,000円 「銭湯」とその周辺地域の持続可能性に関する研究

2) 研究分担者

・基盤研究(A) 岩佐明彦 テリトリーオ概念を援用した地域課題への包括的アプローチ

・基盤研究(A) 金谷匡高 テリトリーオ概念を援用した地域課題への包括的アプローチ

・基盤研究(A) 栗生はるか テリトリーオ概念を援用した地域課題への包括的アプローチ

・基盤研究(A) 陣内秀信 テリトリーオ概念を援用した地域課題への包括的アプローチ

・基盤研究(A) 高村雅彦 テリトリーオ概念を援用した地域課題への包括的アプローチ

・基盤研究(A) 根崎光男 テリトリーオ概念を援用した地域課題への包括的アプローチ

・基盤研究(B) 川久保俊 807,000円 パッシブデザイン導入に向けた世界の建築気候図作成と気候変動適応策への応用

2. 2020年度中に採択を受けた外部資金(全て科研費)

1) 研究代表者

・基盤研究(B) 2017-2022 高村雅彦 1,250,000円 東アジア都市の住宅地形成と集合住宅に関する学術調査

・基盤研究(C)(基金) 2017-2021 米家志乃布 900,000円 民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究

・基盤研究(C)(基金) 2018-2021 松本剣志郎 800,000円 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究

・基盤研究(C) 2019-2021 川久保俊 1,800,000円 住環境改善がもたらす健康影響シミュレーション手法の開発

・基盤研究(C) 2019-2022 山本真鳥 900,000円 オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究

・基盤研究(C) 2019-2021 中丸宣明 700,000円 明治前期における新聞に付随する書籍・印刷物の研究

・基盤研究(C) 2019-2023 大塚紀弘 900,000円 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究

・基盤研究(C) 2019-2021 安孫子信 1,120,000円 オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究

・基盤研究(B) 2019-2022 小口雅史 3,310,000円 古代末期防衛的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築

2) 研究分担者

・基盤研究(B) 2015-2020 高村雅彦 590,000円 台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から

・基盤研究(S) 2017-2022 川久保俊 1,000,000円 住環境が脳・循環器・呼吸器・運動器に及ぼす影響実測と疾病・介護予防便益評価

・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)) 2019-02-07~2022-03-31 川久保俊 370,000円 都市における暑熱リスク軽減を目的とした対策導入シナリオに関する国際共同研究

・基盤研究(A) 2018-2022 小口雅史 150,000円 平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化

・基盤研究(B) 2016-2020 小口雅史 1,720,500円 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究

・基盤研究(B) 2017-2021 小口雅史 260,000円 中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究

・基盤研究(B) 2016-2020 大塚紀弘 30,000円 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究

・基盤研究(B) 2019-2021 安孫子信 220,000円 ベルクソン『時間と自由』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の深化

・基盤研究(B) 2019-2021 陣内秀信 1,000,000円 地理的表示(GI)を活用したSDGsに寄与する農業と農村振興に関する日欧比較研究

・基盤研究(C) 2019-2023 小林ふみ子 100,000円 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究

・基盤研究(A) 2017-2020 森田喬 400,000円 人と社会の側からみた地図・地理空間情報の新技術とその評価

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・研究開発センター市ヶ谷事務課作成資料および科学研究費データベース KAKEN による。

⑥ 研究所(センター)における研究活動等に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入。

ほぼすべての国際シンポジウムと研究会について Zoom を利用したオンラインで開催し、滞りなくスムーズに運営することができた。とくに、日中韓の国際シンポジウムでは Zoom の通訳機能を最大限に活用したことにより、今後の可能性を新たに知ることができた。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・江戸東京研究センターホームページ「シンポジウム・研究会等報告」
https://edotokyo.hosei.ac.jp/symposium_collegium

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・文系と理系の異分野融合の研究組織であり、かつ研究業績が上がっている点。 ・学外の研究組織（大学、博物館）や地域、企業などとの連携活動の可能性があり、かつ実際に実績が積み上げられている点。 ・学内の人的ネットワークを多様に作る点。 	1.1 ①

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>2016年度に担当理事を交えた文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」採択のための戦略会議に始まり、その後、国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターによる共同申請の要望を常務理事会から打診され、それを受けて幾度にもわたる両者の会議を経て申請にこぎつけ、2017年度末に文科省による採択が決定して現在に至っている。当初の予定では5年目の2021年度までが事業支援の期間であったため、本年度に大型研究費の申請を行って2022年度以降の資金の獲得を目指すことが必須となっている。総じて、設置研であるがゆえにそれがセンター継続の条件となっており、そのことが大きな問題点であり、課題であると考え。</p> <p>当センターは法政大学のブランディング事業として文科省から認定を受け、また各研究員の絶え間ない努力から社会に広く認められた存在にもなった。加えて、当センターは二つの研究体から組織されたために、設立当初からすでに研究員は両方の研究に従事しなければならないにも関わらず、多大な成果を蓄積してきたのである。</p> <p>法政大学として、江戸東京研究センターを大学の研究ブランディングであると社会に広く標榜した以上、大学が当センターの位置づけをどのように考えているのか、またそれを安定的なものとするようこちらからも要望していくことで解決を図りたい。</p>	1.1 ③ 1.1 ④

【この基準の大学評価】

江戸東京研究センターは、国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターを基盤として作られ、2017年度末に文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」の採択を受けて活動を展開してきたものであり、2021年度には当初の支援期間の最終年度を迎える。そのとりまとめの前年度にあたる2020年度の研究・教育活動実績を見ると、Covid-19の影響下にあっても2回の国際シンポジウム、6件の国内シンポジウム、研究会、公開講座の実施、多数の著書、論文、学会発表などの成果を着実に上げている。また、成果に対する書評やメディア出演、一般雑誌の掲載に見られるように、広く社会に本事業の重要性のアピールも行われており、高く評価できる。

計画されていた2回の国際シンポジウムをオンラインで開催できたことも特筆に値する（2020年10月17日の日中韓を主体とする国際シンポジウム「都市・自然・人間」を東アジア都市史学会と共同で開催。2021年2月20日に国際シンポジウム「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」を開催）。オンラインで同時通訳も行って国際シンポジウムが実施できたことは、Covid-19による制約の克服という意味だけでなく、オンラインの強みをいかした学際的かつ国際的な学術交流の深化とその成果の発信という新たな意義を持つことができたと考えられる。

III 2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的研究教育拠点の形成。エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所が共同し、国際化の時代に対応した先端的な江戸東京研究を行い、研究成果を社会に広く還元するとともに、持続可能な地域社会の構築を目指す教育拠点となる。
	年度目標	当センターのブランド化を推進するための一つの戦略として、そのターゲットを国内から国外へと広げるための「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」を年度目標とする。本年をさらなる

		飛躍の年として、2021年度に大きなまとめを実施し、2022年度以降も学内外でセンターの存続と研究の継続が認められる組織体につなげていきたい。	
	達成指標	年度目標の達成のために、すでに実施した2020年1月のヴェネチアでの国際シンポジウムに続き、11月に日中韓を主体とするアジア国際シンポジウム、また秋には日韓の文化交流イベントを本学で開催する。こうして、主な達成指標は年度内に2回の国際シンポジウムを開催することであり、国際的な学術交流をより深化させるとともに、研究成果を世界に向けて発信していく。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	センター設立当初の年次計画の通り、「江戸東京と海外都市との比較研究と海外連携強化」を当該年度の事業目標とした。そのうえで、左記の達成指標にしたがい、2020年10月17日に日中韓を主体とする国際シンポジウム「都市・自然・人間」を東アジア都市史学会と共同で開催し、続けて2021年2月20日に国際シンポジウム「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」の開催を実現した。いずれも空間的に拘束されず、また同じアジアということで時間的にも不都合のないオンラインで開催し、当センターが国際的な情報発信の拠点となる礎を築くことができた。
		改善策	特になし
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	東京の貴重な水辺である外濠・玉川上水をはじめ、東京の地域に対する関心を高め、具体的な環境改善につなげる	
	年度目標	各シンポジウムでは広報を積極的に行って参加を募り、知的な機会を社会に提供することが具体的な貢献となる。また、そこで得られた研究者や市民との間に交流のためのネットワークを築き、社会との連携を強めていく。とくに、国際シンポジウムという性格上、海外の人々との連携につなげることが期待できる。また、それらのシンポジウムの内容を著書や報告書として刊行し、ひろく成果の公表に重きを置くことで社会に貢献し、ブランド化の認知をさらに推し進めようとするものである。	
	達成指標	2020年の3回にわたるシンポジウムの内容を書籍あるいは報告書として刊行し、広く社会に研究成果を広めることが具体的な達成指標となる。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
理由		2020年1月のヴェネツィア、10月の日中韓、2021年2月の日韓の国際シンポジウムのうち、10月の日中韓の成果のみプロシーディングスとして研究報告書を作成できたが、ほかの二つに関しては刊行できていない。	
改善策	1月のヴェネツィアの国際シンポジウムに関しては、現在日伊双方で書籍の同時刊行の準備が進められていて、2021年夏までには実現する予定である。また、2021年2月の日韓のシンポジウムに関しては、研究者相互の活動と交流の継続が確認され、近い将来何らかの形で成果物を公開し、広く社会貢献を目指していきたい。		
<p>【重点目標】 「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」のみに集中し、それを重視して2020年度の目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 2020年1月のヴェネツィアシンポジウムに続いて、2回の国際シンポジウムを本学で開催する。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 当センターのブランド化を推進するための一つの戦略として、そのターゲットを国内から国外へと広げるための「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」が2020年度の年度目標であった。そうしたなか、2回の国際シンポジウムを開催しただけでなく、各国の研究者との交流がオンラインの活用によってむしろ活発になり、相互の研究交流が飛躍的に進んだ。それ以外にも、国内シンポジウム・研究会6件、著書4件、論文39本（うち査読付論文5本）、学会発表9件、報告書1件、成果に対する書評9件、メディア出演や一般雑誌の掲載26件に及ぶ積極的な研究活動、社会貢献、社会連携を実現した。今後、2021年度に大きなまとめを実施して、2022年度以降のセンターの存続と研究</p>			

の継続につなげていきたい。

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

江戸東京研究センターの 2020 年度目標の達成状況は、ほぼ適切である。2 回の国際シンポジウム（「都市・自然・人間」および「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」）を Covid-19 の影響下にもかかわらず、オンラインで予定通り開催することができたことは高く評価できる。

2020 年 1 月のヴェネツィアにおける国際シンポジウム、2020 年 10 月の日中韓を主体とする国際シンポジウム、2021 年 2 月の国際シンポジウムのうち、成果のとりまとめは 10 月の日中韓の国際シンポジウムの報告書のとりまとめのみであるとのことだが、ヴェネツィアの国際シンポジウムに関して日伊双方で書籍の同時刊行が 2021 年夏までに予定されているとのことであり、実現が期待される。

IV 2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的研究教育拠点の形成。 エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所が共同し、国際化の時代に対応した先端的な江戸東京研究を行い、研究成果を社会に広く還元するとともに、持続可能な地域社会の構築を目指す教育拠点となる。
	年度目標	文部科学省による当初の支援期間の最終年である 2021 年度は、5 年間の研究活動の成果をまとめて広く公表していくことが目標となる。 。それを受けて、2022 年度以降も当センターが継続するための研究のテーマを新たに見出していくことがより大きな目標となる。節目の年にあたるため、研究活動の年度目標と次の社会貢献は密接に連動させ展開することが求められる。
	達成指標	5 年間の成果をまとめたシンポジウムを 9 月に 2 回開催し、また同時期に法政ミュージアムにて当センターの特別展を実施し、研究活動の内容を広く公表していく。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	東京の貴重な水辺である外濠・玉川上水をはじめ、東京の地域に対する関心を高め、具体的な環境改善につなげる
	年度目標	公開シンポジウムの開催、ミュージアムへの展示協力、著書の発行、市民との共同プロジェクトを通して、社会貢献・社会連携することが目標となる。
	達成指標	9 月のシンポジウム開催ならびにミュージアム展示、東京とヴェネツィアの水都に関する著書の日伊同時かつ共同出版の実現、外濠市民塾の開催を達成指標とする。

【重点目標】

文部科学省による当初の支援期間の最終年である 2021 年度は、5 年間の研究活動の成果をまとめて広く公表していくことが目標となる。それを受けて、2022 年度以降も当センターが継続するための研究のテーマを新たに見出していくことがより大きな目標となる。

【目標を達成するための施策等】

5 年間の成果をまとめたシンポジウムを 9 月に 2 回開催し、また同時期に法政ミュージアムにて当センターの特別展を実施することを目標達成のための具体的な施策とする。その結果を受けて、2022 年度以降も当センターが継続するための研究のテーマを新たに見出していくことがより大きな目標となるが、そのためには、大型研究費の申請に加えて、法政大学として江戸東京研究センターを大学の研究ブランディングであると社会に広く標榜した以上、大学が当センターの位置づけをどのように考えているのか、またそれを安定的なものとするよう、こちらからも要望していくことで解決を図ることが、次年度以降に関わる目標達成のための基本的な施策となる。

【2021 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

江戸東京研究センターは、2021 年度は文部科学省による当初の支援期間の最終年度であり、中期目標・年度目標ともに適切に設定されている。

5 年間の研究活動の成果をとりまとめて 2 回のシンポジウムや法政ミュージアムにおける特別展の形で広く公表していくことを 2021 年度の重点目標に位置付けていることは、節目の年の目標設定として極めて重要であり、達成を期

待したい。

また、新たなテーマを見出して大型研究費の申請をおこなうという目標も意欲的なものと評価できる。江戸東京研究センターを法政大学としてどう位置付けていくかの整理も 2021 年度の重要な課題であり、大学との協議を尽くしていただきたい。

【大学評価総評】

江戸東京研究センターは、国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターを基盤として作られ、2017 年度末に文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」の採択を受けて活動を展開してきたものであり、2021 年度には当初の支援期間の最終年度を迎える。そのとりまとめ前年度にあたる 2020 年度は、Covid-19 の影響下にあっても 2 回の国際シンポジウム、6 件の国内シンポジウム、研究会、公開講座の実施、多数の著書、論文、学会発表などの成果を着実に上げることができた。また、成果に対する書評やメディア出演、一般雑誌の掲載に見られるように、広く社会に本事業の重要性のアピールも行われており、高く評価できる。

さらに 2 回の国際シンポジウムを同時通訳を伴ってオンラインで開催できたことは、オンラインの強みをいかした学際的かつ国際的な学術交流の深化とその成果の発信という点で特筆に値する。

2021 年度は 5 年間の研究活動の成果をとりまとめて広く公表する年と位置付けられており、2 回のシンポジウムの実施や特別展の開催が予定されている。さらに新たなテーマによる大型研究費の申請も予定されていることから、法政大学として同センターをどう位置付けていくかの整理も 2021 年度の重要な課題であり、大学との協議を尽くし、一層の対外的発信を進める上での軸としていただきたい。